

日英語の比較をめぐって （その3：日本語助詞論の3）

宇 納 進 一

Abstract: What follows is the third part of the attempt to describe some Japanese grammatical items and their English equivalents. More specifically, it continues the discussion on two Japanese particles, “ha” and “ga”, and explores the possibility of the semantic descriptions of them. It attempts to reexamine the notions like “topic” and “subject.” A proposal will be made that some conventional characterizations of the particles in concern should be rejected.

2.2.1. 東京へハ何度も行ッタの如く、へとハという二つの助詞は並び立つことができるのに対して太郎ガハの如きガとハの共起は許されないことが問題であった。ここで、助詞ガとハをめぐる一応の立論をしておこう。

助詞ハは（巷間よく言われるような）「主題提示」および「対比」という二面的機能を持つ、あるいは情報の新旧その他と相関するものとは規定せず、統一かつ単純に「排他」を勝義とする助詞と考える。「排他」を将棋とすると、すなわち、

XはYなり

とは、「X以外はいざ知らずXについてYと言う」という文義と考えるということである。言い換えれば、「他はさておき」というわけで、ハは「さておきの助詞」ととらえたい。

一方、助詞ガは「あてはまり」の助詞である。すなわち、

XがY

とは、Yという陳述はXにあてはまる、ということである。すなわち、

XがY = YなのはXである

であり、従って、例えば、

公会堂が右折で、野球場が左折です

というのは、「右折だ」という陳述が（その陳述内容が何を意味するにせよ）「公会堂」にあてはまるのだ、の意である。従来言われるような主格という機能はガの職能の一部にすぎない。公会堂＝右折ということはある得ない。右折とは「右に回ること」であるから、公会堂が「右に回ること」であることは出来ない。公会堂は建造物である。このような駄弁を弄する必要など勿論無いのであって、この文は日本文法研究においてはおなじみのウナギ文（ボクハウなぎダ：ボクガウなぎダ）構造が関ったものだ。ウナギ文の上位節の名詞に付随するガは主格ではないと考える。論述の都合上、まず、ハの議論から始め、ガについては少し先に論じることになる。

まず、ハについて。本稿の考える助詞ハの職能については代表的な日本文法諸家のうちでは山田孝雄に（基本線において）近いものであり、近年の研究において尾上（1981）に（本質において：つまり、換骨奪胎的に）近いものである。まず、山田（1936：p.486）がハを規定す

る部分を引いておく。

「は」はその意排他的にして事物を判然と指定し、他と混乱するを防ぐに用ゐらる。これが係りとなるとときに之に対する結は終止形（口語にては連体形）を以てするものなり

引用の後半部分はいわゆる係り結びについての言及であり、本稿ではこの点については考察の対象にしないが特に問題が起こることはないであろう。この山田のハの規定には佐久間鼎（1951=1940：212）の批判があって、次のように言う、

助詞「は」が「排他的」で、事物を判然と指定し、他と混乱するのを防ぐに用いられるとは、山田氏などの指摘するところです。それは次のような例については、いちおうなずかれます。——

僕は散歩に出かけるが、君はどうだ？

あしたは行けるが、きょうはだめだ。

…

ところが、[略]の場合について見ますと、すぐに排他的というのはどうか、むしろ行き過ぎてはいないか？——たとえば、

雪は白い。

というのは、「雪以外のものは 白くない」という風に述べているのではありません。

これは 鉛筆だ。

というばあいには、「それも鉛筆だ」という判断を拒否するわけではありません。…一つだけを挙げて他をこぼむというのが助詞「は」の本来の役目なのではありません。二つ並べて反対なのをいうときでも、排他的とまでいうのは穏当ではありませんまい。

ここで佐久間は山田の説をハの職能をいわゆる対比のハに傾し過ぎた不十分な立論と言っている。それをハのすべての用法に敷衍するのは行き過ぎであり、さらに、その対比のケースに限っても「排他的というのは穏当」でないとやっている。行き過ぎでも不穏当でもないことは後に詳説する。

尾上（1981）のハの規定は大変興味深いものである。上に本稿の考えは本質において尾上の説に近い、と書いたが、実は幾つかの重要な点で違いはある。ある一点において近い、ないし、同じなのである。少し長くなるが、簡単にその説を紹介しなければならない。まず、尾上はハの性格付けを、「ハの係助詞性」と「ハという助詞の意味的個性」の二面からとらえようとする。具体的には、まず、ハは、係助詞として文中の一点に位置して文を二項に分節し、しかる後、この分節が全体として一つの結合体を成していることを確認するものであるという。一方、ハは、また、助詞の一つとして《分説性・排他性》という意味的個性を持つ（『分説性』とは松下文法にいうところのそれであるらしい：後述）。ハの文中における働きは、尾上によれば、まさにこの二つの側面を一体的にとらえることによって見えてくる。このことを具体的に見るにハの対比的な用法の拠って来たところを論じている。まず、係り結び性ゆえにハは文中の特定の要素を対比するのではなく句全体を対比させるものである。すなわち

大山君は来たが、小山君は来ない

の文においては、一見、対比されているのは大山君と小山君のようである。が、

春は来たが、まだ暖かにならない

の文で知れるように、春そのものと対比されるべき特定要素を後半句に求めることができない場合があり、結局、ここではそのハの属する句（節）全体が対比されている。尾上に抛れば、先の例文もたまたま部分と部分の対比のごとく見えるだけで、本来、ハは句を一旦分断し、その分断された二項が現実世界の描写として結合され得るという判断を提示する。その意味で、

空が青い

のような措定的判断を根底から確認するのがハ文であるという。そして、このことゆえにハのもたらす対比性は、そのような結合判断に発して、句全体を問題にするもの、ということになる。ハの第二面、すなわち、排他性という意味的個性についての論は、やや、短くまとめにくく、抽象的でもあるので、そのまま引用する。

二項の結合の確認のしかたという面で、「も」の合説・添加とは対照的に、「は」は、その結合が特に成り立つ — 他の並行的な結合が成立しないという環境の中でその結合が独自に成り立つ — という確認のしかたをする。その意味で、全ての「は」に分説性・排他性が内在していると言うことができる。しかし、考えてみれば、文というものはすべて、元来カオスの中からその文事態を特にとり出すという面をもち、その限りで他の文事態一般との区別、対立を内包するものである。それゆえ、文中に「は」があっても、その「は」の排他性が全ての文に本来内在する排他性の中に溶け込んでしまう場合には、特に表面に他との対比という意味を感じさせることはない。文中に「は」が存在して対比の色が濃く出るのは、「当該事態と内容的に対立する他の事態の並立存在」ないし「並行的な他の自体の不成立」、総称して他の対立的事態が、何らかの条件によって、強く想起される場合に限られるのである。（傍点は原著者）

ここで、尾上の主張していることとは、ハの係り結び性に由来して、主題的なハも対比的なハも二項の結合からなるある事態の成立を主張するものであること、そして、無限に多様な可能的事態の中から一つの事態を選び出してきた一つの文は、常にその無限に多様な、つまり、いわば、茫漠とした事態の集合との対立を孕んでいるから、ハはすべてのケースにおいて対比的であること、そして、このようなハはなにか積極的にそこから逸脱していく契機が無い限り、対立しているものの不分明さによって、あまり対比的とは認識されないような性格を持つこと、などであろう。（この尾上の説にたいしても、大島（1995：120）の誤解に基づく批判があるが、どのような誤解であるのかは後の議論の過程で明らかになるであろう。日本語の研究においては、未消化なまま他の節を批判しあう、という構図がよく見られる。このことは、当の研究者達を非難するべきなのではなくて「なとなれば、本稿もまたいたるところでそれをやらかしているに違いないから」言語を言語で語ることの難しさを物語っている。そして、その煽（シナ）やか・煽（タオ）やかなる文構造の故に、日本語を日本語で語ることは、英語を英語で語ることよりはるかに難儀なのだ、ということも示していると思われる。）尾上は、こう述べた上で、ハの対比性が目に見えたものになってくる契機として、例えば、「非常態的二分結合等の条件」を提示する。非常態的結合とは何の謂いか、といえは。

猫は耳が鋭い

という文は猫と耳が鋭イという主部と述部からなるとすればまさに主部と述部という分割は常態的二分であり、このように分割された二項を結合する位置にハが現れた時、そのハの持つ排他性はまさに上のカオスからの分立としてあらゆる文が持っている排他性にすぎず、一方、

猫は耳は鋭い

においては、述部内部における分割という非常態的分割を持ち、このような（いわば統語的な切れ目と重ならない）結合点に現れるハは、「特にその点における結合の成立如何を問題とするものとなり、「は」の排他性からその点における並行的な他の結合（「鼻は鋭い」など）の不成立を暗黙のうちに想定して、それに対する対比の色を帯びることになる」（傍点原著者）。

あらゆるハが対比のハとしての性格を持っており、主題（提題）的なハと対比的なハは同じものである、という一点において、本稿の考えは尾上と本質的に一致する。しかし、ハの担う排他性はすべて本来句全体を対象にするものだ、という主張、及び、目に見えた対比性は非常態的二分結合（すなわち第一次的な結合点〔主部と述部の切れ目〕以外にハがあらわれること）に由来する、という（極めて興味あるものではある）主張には、本稿はこれを肯んじない。だが、これらの反論・反証をするには、まだ、ここでは効果的でない。これは少し先で行うこととして、ここでは尾上の論の紹介にとどめる。

本稿の本題であるハとガの非共起性の説明を目指して、ハとガについての考察を以下に提示することになるが、上にとりあえず規定したハの基本的職能の議論から始めよう。本稿の主張は、日本語におけるハはすべてある一種類のハであり、主題と対比というような区分けは不要である、ということ、および、そもそもハ自体には主題提示という職能は無い、あるいは（後に見る）情報の新旧等とも何の関係も無いということである。

このように考える出発点は、第一に、主題という概念の不明確さであり、また、それに由来して実使用時のハを主題と対比へ截然と分別することの困難さである。明らかに対比とは解し得ない用例におけるハにしても常に「主題」などと呼び得るものなのか。例えば、

A：太郎は天才なのだろうか？

B：私はそう思います。

というやりとりの後文は本当に私を主題とする、つまり、私について陳述している文なのであろうか。話者Aの問いかけは太郎に関してのものである。この（ハを伴う）太郎を主題と呼ぶことにはなるほど理が無いではない。しかし、この問いかけは私（話者B）について何かを尋ねてなどはない。では、話者Bは何ゆえに、私（B）について陳述することを以って、その答えとなしうるのか。事実は、（助詞ハの存在にもかかわらず）話者Bは私を主題などとして提示してはいない、ということであろう。しからば、この時のハは対比のそれとして使用されているのだろうか。幾らかはそうだろう。しかし、

次郎は好きだが、太郎は好きではない

と較べれば、上の私ハはその対比意識は極めて低い。結局のところ、対比か主題かと言ったところで、不分明なもの、程度の問題に過ぎない、というのが真実であろう。

また、

A：やあ、これは吉田さん、お久しぶりです。

B：これはこれは、小田さん、ご無沙汰しております。奥様お元気ですか

A：お蔭様で。ところで、明日、服部さんに会いますが、何かおことづけでも？

最後のAの科白において服部サンの前に省略されているのは私ガではなくて私ハであろう。

始めから省略可能な主題（つまり、このダイアログは私を巡るやりとりでもないし、私ハは一度も出現していないにも関わらず突然省略形で現れる私ハ）などというのはそもそも何なのか。ハがついていればそれが主題である、ということは明らかに成り立たない。それでは、主題でもない対比でもないハとは何であるのか。

更に、あるハが主題と対比のいずれに働いているのか、ということがハのあらゆるインスタンスにおいて截然と画離できるのか。

太郎が天才だって？

世間はそう言っています

そして、そもそも、「主題」なる代物はハの介助を俟って始めて立ち現れ得るものなのだろうか。

（ある極道の通夜で）

あいつは、ほんとに、ノム・ウツ・カウだけだったなあ

あいつも、ほんとに、ノム・ウツ・カウだけだったなあ

あいつと来た日にゃ、ほんとに、ノム・ウツ・カウだけだったなあ

通夜の席で故人（の偉業？）を偲ぶ発話として、この三文はどれも適切であろう。そして、より重要なこととして、何について（主題）何が語られているか（陳述）という情報構造的にこの三文に何か違いなどあるのだろうか。何をもち、第一文のみが主題を持つ文などと特別視されなければならないのだろうか。第一文と第二文については、松下大三郎に分説と合説という概念があって、松下文法ではハとモが主題提示の助詞とされている（松下 [1961=1930: 338-9]、本稿の以下も参照）。しかし、ハとモはそれほど単純に並立し得る助詞ではない。一定の副文中では、

その件は、太郎が来た時にお話します

* 太郎は来た時にお話します

太郎も来た時に説明します

の如くハは使用できない、しかし、モは可能である。松下用語では、ハとモ（及びφ）に導かれる題目語とは「判断の対象」である。しかし、副文中にもあらわれることによって、モの本義は題目提示では必ずしも無い、ということが解かる。モはあくまでそれ独自の意味機能をもっており、それが時に題目提示の位置でも使用可能であるに過ぎない。さすれば、ハもまた同様に捉える可能性が出てくる。すなわち、ハはハの独自の意味用法を持ち、時に（実際は、多くの場合に）題目語に随伴し得るにすぎない、という可能性である。以下にその可能性を検討することになるのであるが、とりわけ、主題提示として使われているかのように見える時のハは意味的に空虚な純粹に主題提示のみの職能をもってそこにいるのか、といえ、そうではないことを後に見る。

主題＝ハではないこと、また、そもそも主題とは何であるのか、について更に次のような事実を確認したい。

この竿で魚はつれないぞ

これはあきらかにコノ竿について語っている文である。少なくとも、魚は断じてこの文の中心的な語り対象ではない。魚に付されたハはある程度のストレスがあれば概ね否定辞が呼び出した対比（魚以外 [空き缶、流木、浮遊ゴミ等] はさておいて）の意とみなせるであろう（ストレス無き場合については下記参照）。また、この文は、ハを伴う次の文、

この竿では魚は釣れないぞ

と、大きな意味の差がない（ハにストレス無き場合）。勿論、この二文には何らかの違いはあろう。また、日本語では微細なストレスやピッチの違いによってその文の使用可能な文脈は自在に変幻する。しかし、極く平均的な（というようなものがあるとして）解釈において、この二つの文はコノ竿について語っている点で目に見えた違いはない。かくて、ある文が何について語っているか、ということが必ずしもハの有無で決定されているのではない、ということになる。なにゆえに、ハがつくものばかりを主題と呼び、ハ無きものはどれほどその文によって語られているものであろうと名も無き要素として打ち捨てられているのだろうか。

さて、ハは主題、などというときの主題なる概念のあいまい性について見てきたが、ハとガの使い分けという観点から従来言われていることの一つに情報の新旧というものがある。これについても幾らかを見て論を進めることとしよう。すなわち、ガは新情報に、ハは旧情報に付着する助詞という考え方である。従来謂われる意の主題にあっては、通常、それは旧情報である、とされることが多いので、このことも主題との関連で論じるべきことであろう。

太郎は来ました。

太郎が来ました。

上の文では、すでに太郎が談話中の話題となっているものであるのに対して、下の文では、この文で始めて太郎が談話に導入される、と言われる。山田みどり（1984）によれば、ガとハの関係についてのこれまでの研究は

A〔未知と既知〕 ガは未知の語を、ハは既知の語を承ける。

B〔普通ととりたて〕 ガは普通の表現に用いられ、とりたての時にはハを使う

という二つのタイプに大別されるという。その意味では、未知・既知情報というのが日本語助詞の把握ではかなりクローズアップされたテーマのようである。これらについては後にも検討を加えるが、まずは、そういう問題の具体的な議論の代わりに、次のような談話を観察しておこう。

「ねえねえ、みんな、俳優は誰が好き？」

「え、そりゃあ、僕は断然アル・パチーノがいい」

「私はやっぱりニコラス・ケイジだわ」

「僕はなんたって、メグ・ライアン」

「俺は...」

「よし、集計してみよう。市郎はアル・パチーノで、治朗がトミー・リー・ジョーンズ、花子はニコラス・ケイジで、三郎がロバート・デ・ニーロ、士郎もトミー・リー・ジョーンズで、吾郎は浦部彗子か...。」

気が置けぬ者達の間での雑談であり、話はアチラに跳び、コチラに跳ねる。第一文はまったく唐突に映画／俳優を話題に持ち出して登場した、ということはまったくあり得ることであろう。すると、その文中の「俳優」のどこが旧情報なのだろう。だが、そのことは、今は置く。問題は最後の文である。情報の新旧という問題と、主題か否かという問題の二点において、市郎から吾郎まですべて対等の資格だ。それらにハがつくものあり、ガがつくものあり、モがつくものあり、というのが助詞の使われ方の実相である。更に言えば、上の集計文において、ハ、モ、ガの三助詞はかなり自由に取り替えることも出来る。従来のがやハの捉え方はここでははなはだ無力と思わざるを得ない。もうひとつ、例えば、松下（同上 [1961=1930:338-9]）は、

私が山田です

私は山田です

という違いを例に、ガは未定可変で選択自由な概念に付き、ハは既定不可変、選択不自由な概念に付くと言ひ、亦、佐久間鼎（1951=1940：206-14）は

雪が白い

雪は白い

の例を以って、ガは眼前の光景の描写に用いられ、ハは観念の世界における判断の際に用いられるとする。ここで、山田にせよ、佐久間にせよ、これがガ、ハの規定のすべてである、と言っているわけではないが、かなり枢要な部分として述べているものと解釈できる。すると、

（ある一人の人を紹介するとき）

ご紹介しましょう。こちらは山田太郎さんです。[ガも可であるがハがベター]

（複数の人を紹介するとき）

ご紹介しましょう。こちらが山田太郎さんで、こちらが鈴木一郎さん、

こちらが... [ガのかわりにハを使うことも可ではあるがガがより適切]

通常ハが使われているところで、対象が複数になるだけで、ガの登場が突然許容される、といった事実はどう扱えるのであろうか。人を紹介するにあたってガを使うと山田太郎は既定的（例えば、すでに知られた人：俺ガ勝新太郎ダ！の類い）になることが多いのは松下の言う通りだが、ハが使われるのとまったく同じ文脈で、同じく既定的でない人の紹介が複数の場合にはガで行われるのである。また、佐久間の眼前と観念の区別もここにはまったく関係がないと言えるであろう。（ガについては後に論じることになっているが、簡単にコメントしておけば、通常はハが好まれる文脈で複数の対象物があるときにガが登場するのは、ガがあてはまりの助詞だからである。山田太郎デアルという陳述があてはまるのはコチラであり、鈴木一郎デアルというのがあてはまるのがコチラである、と区別する必要があるからである。紹介される人が単数であれば、この必要が無い。）

かくて、ハの主務が主題提示にあり、あるいは、旧情報の提示にあり、といった固定観念、更に、ある時は主題を提示したある時は対比をあらわす、などという多羅尾伴内の性格付けを解消することこそ日本文法におけるハの職能のより割切なる捉え方なのではないか、という可能性が見えてくる。

ここで言った、“ある時”と“またある時”の区分けが糸口になりそうでもあり、ここから、論を進めることにしよう。“ある時”と“またある時”は事象的にはストレスの有無と相関させることが出来そうである。ストレスが明確にある時は対比のハと呼ばれ、それが最小の時主題と呼ばれる、ということに概ねはなるであろう（実際の我々の日本語運用においてはストレス最小から最強までの間で微妙に強弱があることも指摘しておくべきだろう：微妙さの例は後に見る。）。日本語における、あるいは、普遍的なストレスの代表的機能は強意・強調であろう。すると、仮にハの職能が本稿の主張のように「さておき」の助詞であるならば、目立ったストレス無きハは「弱いさておき」であり、それを伴うハは「強いさておき」ということになる。さておきの強弱とは何であろうか。何はさておき、これを論じなければならない。

XはYなり

において助詞ハの職能（“さておき”）とは「以下の言明はX以外のモノを対象としない」という宣言である。ストレスが強意をあたえるのはまさにここである。今ここに述べた括弧内の

宣言の日本語文そのものを吟味されたい。「言明の対象としない」というのは論理的あいまい性を持っている。

太郎は賢い

において、太郎以外は言明の対象にしないということは、太郎以外に賢い人のいることを否定するものではない（上で引いた佐久間の山田孝雄批判はここで誤解をしているわけである）。しかし、対象としないということは賢いという言明が太郎以外の人には当てはまらないと言っているような面もある。が、最終的には通常そのあたりはあいまいである（あるいは、あいまい、という言い方があいまいであるならば、「意識をしない」ということである）。ここで、強ストレスを伴うことで、「対象としない」が「絶対に対象としない」に変わるのだと考えてみる。賢いという叙述が太郎以外の人には当てはまらない（つまり賢くない）という響きが強くなるであろう。つまるところ、ストレス最小時は、太郎以外の人賢いか否かはあいまいに残される（不問に付されている）。ストレスを伴う時、否やが（形式論理的にではなくて結果的に）増強される、ということになるであろう。ストレスとは、ある思惑があってつけられるものである。その思惑とはかくて否やの増強ではなかろうか。否定が強まる、というのは佐久間から言い過ぎのそしりを受けるかもしれない。しかし、とにかく、弱くしておきとはX以外のものの弱い排除であり、そこでは、積極的にX以外のものは意識されない。また、それは「とりあえずXを言明の対象と宣言します」という程度の意味になる。一方、強くしておきは、強い排除であり、このような時には排除されたものがかなり意識にのぼっている、そして、多くの場合、結果的に、それは否定の対象にもなる。はなはだ荒っぽい記述様式ではあるが、ハというものの働きはこのようなものとまずは捉えてみたい。（以下の事例に即した論述で順次明瞭になっていくものと期待する。）

主題＝ハではないことの一つのケースとして先に次のような例文を見たが、ここでそれを再論して所謂主題とハとの関係を考えよう。

この竿で魚はつれないぞ

これはあきらかにコノ竿について語っている文なのであった。少なくとも、魚はこの文の中心的な語りの対象ではない。魚に付されたハはある程度のストレスがあれば概ね否定辞が呼び出した対比（「魚以外 [空き缶、流木、浮遊ゴミ等] はさておいて：つまり、それらは釣れるかもしれませんが」）の意とみなせ、ストレス無き場合は要するに従来に謂う主題にちかく言明対象の宣言・提示である。また、この文は、ハを伴う次の文、

この竿では魚は釣れないぞ

と、大きな意味の差がない、つまり、この竿について語っているという点では目に見えた違いはないのであった。従って、ここで重要なことは、ある文が何について語っているか、ということが必ずしもハの有無で決定されているのではない、ということだった。

魚はこの竿では釣れないぞ

では魚がより中心的に語られているものと言えそうだが、この文と上の文を比較して解かる事は、主題性はその語の位置によるどころも大きい、ということだ。ハが単独で一義的に「語られる対象」を決めているのではなくて、別の要因がそれを決めており、その上にハがある意味を添えるべく付加されている、と考えるべきではないか。

更に、主題とは文中にあって唯一かつ絶対の存在ではなく、漸層性・階層性を持つ。漸層性とは、ある語の主題性（つまり、「話の中心」性）というのは程度の問題である、の謂いであ

り、そして、階層性とは、ある主題に対する陳述の中でまた主題と陳述の構造が生起し得る、の謂いである。

この竿で魚は釣れないぞ

にあって、この文の最も中心的な話の対象は竿であるが、その竿に対する陳述の内部にあって魚はその話の対象である。この文では、竿について語っている。だが、この文がその一環を構成している談話は明らかに魚釣りを巡るものだ。そのために、この文自体も魚に主題性を与えた表現をしているのであって、

この竿で魚を釣ることはできない

では、魚は話の中心からかなり後退してしまうのである。これは次のような事象等の理解においても重要なことだ。

いやあ、太郎は足が速いから

いやあ、足が太郎は速いから

文脈から孤立して観察されている限り、第二文は落ち着きも悪くあまり使用頻度が高いようには見えない。しかし、

[この間、町で太郎を見かけた／俺を見ると逃げ出した／俺は追いかけたが
捕まえられなかった] いやあ、足があいつは速えからなあ

この文は結局のところ、アイツについても語っているし、足についても語っている。ただ、逃げられた理由を述べるという文の性格において足がアイツより中心に来る。（かくて、この種の文の使用頻度は意外に高いものであろう。）だが、中心でないからといって、この文はアイツについて語っていない、というわけでもない。これは漠たる印象によるものでない。専らアイツの足の速さだけを述べるのなら、まさに、

いやあ、あいつの足は速ええから

と、言っていたはずなのである。そう言わなかったのは、足とともにアイツも話の対象だったからである。言葉の用法を言葉で述べることは難しい。このあたりの論述に首をひねられた読者各位には、次のことだけ、とりあえず、確認しておいて頂きたい。

A：いやあ、あいつは足が速いから、追いつけなかったよ

B：いやあ、あいつの足は速いから、

C：いやあ、足が速いから、

D：？いやあ、足は速いから

D文は珍奇である（勿論、ここでは、

頭の回転は遅いけど、足は速い

のような対比の意ではない、と解釈した場合を問題にしている）。B文は可能であるのに、D文が珍奇なのはなぜだろうか。この説明は、次のようになるかと思われる。まず、C、D文はアイツハが省略されている、と考える。足だけでは誰の足かわからない。省略されているものを補うと、

あいつは足が速いから

あいつは足は速いから

となり、この第二文の足ハのハは対比の意味しか持ち得ない。したがって、上の第四文は対比するものが考えにくい、つまり文脈と不整合な文、と考えられる。ここで何故対比の意味しか持ち得ないかといえはゾウ文すなわち（後に少しだけ詳しく論じる予定の）二重主語構文（あ

るいは綜主構文)の「小主語」は、そういうものだからである。すなわち、

象は鼻が長い

において、象は陳述の対象であり、したがって、象をその他のものと区別する、という意味でさておきのハが使われているのに対して、鼻が長いという部分は象の記述であり、この部分は、従属節であり、話者が直接何らかの主張を行うというものではない。象がある性質を持っている、というのがこの文の主張である。主張が行われる対象に対してはさておきが必要になるのであるが、その陳述部の内部ではこのようなプロセスは必要が無い。

太郎が賢いことは誰もが知っている。

においてハが使われないのとはほぼ同種の論理で、ここではハが使われない。あえて、ハが使われるのは、強い積極的なさておきが必要な時だけなのである。Dにおいて(対比でないかぎり)足にハが付き得ないのはこういう理由によってである。さて、すると、構造的理由でガを持つ足が最上位の主題となった

足があいつは速いから

という文は、追いつけなかった理由として足の速さを指摘している点で、その文義や使用可能な文脈という観点からは、

あいつの足は速いから

という文とまったくと言ってよいほど等価である。すなわち、どちらの文においても足の談話上のステータスは同じである。もし主題と呼びたいのなら、どちらも主題である。第一文においては、足が主題であるにもかかわらずガで導かれているのはその文が持つ構造(すなわち、この文は

[[_{主題}あいつは] [[_{主題}足が] 速い] → [_{主題}足が] [[_{主題}あいつは] [[_{主題}φ]速い]])

というような構造であり、φ位置との関係でハは対比でしか使用できない)ゆえである。

すると、第二文において、アイツノ足がハで導かれていることを理由にしてこれを主題と呼ぶならば、結局、我々は、第一文では、主題がガで導かれているケースを目撃していることになる。

同様に、

ほんと、ルックスがあいつはいいから(、女もつい騙されるよ)

女が騙される理由としては、ルックスが中心を占める。その意味でこの文はルックスを問題にするものだ。しかし、やはり、この文はアイツについても語っている。そして、このことゆえに、この文が属す談話は(男の見栄えの大事さを巡る一般論ではなくて)アイツを巡るものであるに違いない、と我々は受け止める。

足があいつは速えから

あいつの足は速えから

日本文法の議論では、下文の足にはハがあるので、主題と呼ぶことに誰も異論を唱えないことになっている。だが、上文では何故、足が主題でないなどと言えるのだろうか。上下の違いは足とアイツの中心度の違いであり、しかも、その中心度において、上文のハを持たない足はハを持つアイツより上なのである。

以上を纏めるに、日本語の文は

語られるもの + それに対する語り

という基本構造を持っている、と考え得る(これはあくまで意味論であって、統語構造上の主

張ではない）。語られるものを主題（ここでは便宜上の用語と理解されたい）と呼び、語りを陳述（ここでは便宜上の用語と理解されたい）と呼ぶならば、

文 → 主題 + 陳述

である。ここで、主題というのは別にハに導かれるを条件とするものではない。ハという助詞そのものが語句に主題性をあたえはしない。ハはあくまで他者排除である。（ここで大変な[というより、途方も無く]用語上の混乱を招くようなことを本稿は敢えてしているので注意されたい）。主題と陳述は回帰性を持つ。

陳述 → 主題 + 陳述

かくて、上に見てきた例文は、つぎのような構造をしている、と考える。

- ① [主題この竿で][陳述[主題魚は][陳述釣れない]]

（この文はコノ竿について語る。そのことは、主題という位置で表わされる。魚につくハは、ストレスがあればそれは強いさておきで空き缶等を排除し、ストレスが無ければ、弱いさておきで「とりあえず魚を問題にすれば」の意

- ② [主題この竿では][陳述[主題魚は][陳述釣れない]]

（この文もコノ竿について語る。そのことが、主題という位置で表わされる。竿につくハは、ストレスがあればそれは強いさておきで他の竿[ないしは、網のような他の手段]等を排除し、ストレスが無ければ、弱いさておきで「とりあえずこの竿だけを問題にすれば」の意。このハの与えるさておき度が限りなくゼロに近ければ、この②文は①文と等義ということになる[実際、ほぼ等しい文脈で使い得ると本稿は判断する]。)

- ③ [主題魚は][陳述この竿では釣れない]

下記参照。

- ④ [主題太郎は][陳述[主題足が][陳述速い]]

- ⑤ [主題足が][陳述[主題太郎は][陳述速い]]

- ⑥ [主題太郎の足は][陳述速い]

- ⑦ [主題ルックスが][陳述[主題あいつは][陳述よい]]

ここで、③についてはコメントを要すであろう。

魚は太郎が釣る

というような文は、従来、

太郎が魚を取る

の魚ヲにハが付き、そのハがヲを駆逐し、更に、その魚ハが前置されてできる、の如く分析されることが多いように思われる。しかし、本稿では、次のように考えたい。

[主題太郎が][陳述魚を釣る]

という標準形に対して、魚ヲが主題位置に生成されることによって、

[主題魚を][陳述[主題太郎が][陳述釣る]]

という文が生まれる。魚ヲが主題位置にあることによってこれは魚について語る文であることがすでに示される。（実際、この語順では（ヲという助詞とは無関係に）魚を語る文であろう。）この魚ヲという主題にさておきの意を添えるべくハが付与されると、ヲが省略されて（ハが駆逐するのではない：先に論じた省略原則により省略される）、

[主題魚は][陳述[主題太郎が][陳述釣る]]

となる。この時、ハにストレスがあれば

魚は太郎が釣りますから、あなたは飯盒炊飯をやってください

の如き対比的な意、ストレス不在時は「魚について言えば」という弱いさておき。また、魚ヲが本来の位置にとどまり、それにハが添加された場合は、

〔主題太郎が〕〔陳述魚は 釣る〕

なる構造であり、魚ハは主題位置に無い。このような場合のハは通常対比的なものである。最も弱いさておき（つまり、従来に謂う最も純粋な意味での主題のハと呼ばれる時のハ＝「X以外のことは不問にする、とりあえず、話の対象はXだ」）は主題位置以外ではあまり使う意味が無い（、というか、文中のあらゆる要素にそういう「断り」を入れていてはきりが無い）からである。ただし、今、あえて、「最も弱いさておき」と書いた。その謂わんとするところは、さておきはすべて程度の問題であり、談話の流体力学の中では、いろいろの事があるであろう、ということである。（実際、上の諸例においても、対比と非対比の区別といってもかなり曖昧（という言い方があいまいであるなら、境界線が不分明）なものであることに注意しておこう）。

もうひとつだけ、さておきの強弱と主題性を具体例に即して見ておくことにする。

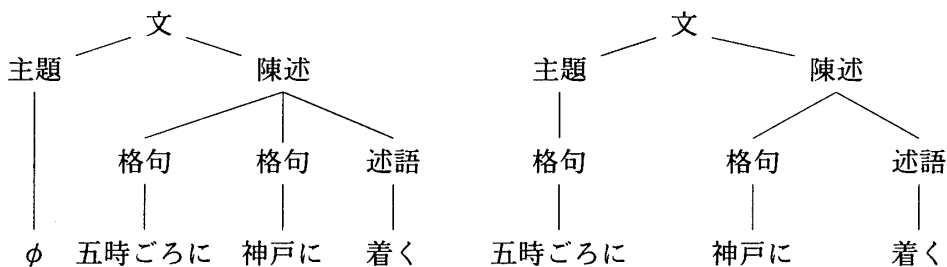
5時ごろには神戸に着きます

この文には（音調によって）次の如き二義性があり、まったく違うメッセージを伝え得る。

（遅くとも）5時に（目的地である）神戸に着く

5時ごろに神戸に着く、（6時ごろに広島に、7時ごろに博多...）。

第一の解釈の時、ハは強いさておきであり、第二の意のとき、ハは弱いさておきである。前者のケースは6時、7時といった「より遅い時間」を意識し、それを排除する。すなわち、5時以外を意識し、強くこれを排除し、（そして結果的に）これを否定する。下の解釈においては、6時、7時を、弱くさておく、すなわち、強く排除するのではなくて、それらを不問に付するだけであり、（かくて結果的に）、「5時」について語ります（「5時」を話の対象として選択します）」という宣言となる。未だこの段階ではこれらの文の正確な構造を提示する準備は出来ていないのだが（第③部参照）、二つの解釈はつぎのような意味的構造の差異も背後に持つ。



前に見たように、非主題位置にある格句につくハは基本的に強いさておきである。主題位置では強弱両様ある。ここで、重要なことは、第二解釈（弱いさておき）の時はハの後にポーズがあるが、第一解釈（強いさておき）時にはそれが無く、かわりに助詞にストレスがある、ということであるが、このポーズの有無は上の構造的差異の産物であり、ストレスは言うまでもなくさておきを強くする為であることは言うまでもないであろう。（その他にも、第二解釈では、神戸にストレスがあり、第一解釈にはそれが無いのであるが、これは勿論、前者では神戸が伝

えたい新情報であり、後者ではすでに何らかの意味（たいていは、神戸＝目的地という意味）で神戸は旧情報だからである）。そして、もっとも重要なこととして、第二解釈で5時ゴロに「主題性」を与えているのは、ハではなく、上のような構造であることに注意されたい。

さて、さておきの強弱ですべてのハの用法を統一してしまう、というのが本稿の日論見である。統語論的証拠というより状況証拠とも呼べるような論も一つ見ておく。上に、実際の我々の日本語運用においてはストレス最小から最強までの間で微妙に強弱がある、と述べておいた。このことと次のような事実を合わせ考えてみる。すなわち、我々は、

A：いやあ、物理は苦手ですから [ハには僅少ストレス]

B：物理は？ [ハには強ストレス] お前、化学も地学も苦手じゃないか

という形式のやりとりをしばしば耳にする。話者Aがまったく無意識に微弱ストレスでハを使用しても、聴者Bは強ストレスでこれをパロットすることにより、他の教科は苦手でない、という含意を別出拡大してこれを揶揄嘲弄する。日本語のディスコースにおいて見慣れた光景であろう。Aには、他の教科は苦手でないが見栄を張るつもり、つまり、積極的に（深層心理的にはどうであろうと）そのようなことを含意するつもりなど無かったのであるが、あくまで聴者は助詞ハの存在を聞き咎める。ここで、重要なことは、話者Bがそのように反応するとき、話者Bとしては（それほど強く）揶揄のための強引な意味のズラシ、意図的な解釈の振りを行っているのではないだろうということだ。

田舎娘：わたし、あのハンサムなジョーダンが好きなの

意地悪：ほんと、お前は冗談が好きだ（、身の程知らずめ）

のような揶揄のための（同音性を足がかりにした）意図的な意味のズラシ（ジョーダンという固有名→冗談）は行っていない。つまり、ハ文に対しては強度の大小はさておいてかすかな「さておき」を我々は常に聞き取っているのである。常に人をからかう機会を待ち受けている皮肉屋でなくとも、われわれは、脳裡において上のB的な反応をある程度はしてしまう、ということに誰も異論はないと思う。かくて、この現象の示すものは、『ハはそのすべてのインスタンス（具体使用事例）において、「さておき度」のスケール、すなわち余物排除のスケールの上で使われ、そして、このスケール上で「さておき率」最小から1（最強）までの間を揺れ動いている』ということである。X以外を弱くさておく、ということは、まさしく、我が発話をXなるモノに対して行う、すなわち、Xを主題とするの宣言の如くなる（「他はさておいて、とりあえず、Xについて言わせて頂きます」）。また、力を込めてX以外をさておくとき、むしろ、X以外のものの存在がクローズアップされる、つまりXがなにもものかと対比され（かつ多くの場合否定され）ることになる。主題と対比の二面性はここに由来するのであり、二つはおなじものの強度の違いである。この点で尾上と本稿はほぼ同一主張をしていることになるのだが、違いもあることはおいおい論じる）。

前に言及した新旧情報との関係も「さておき」という概念の射程内である。ハという助詞に導かれて談話の中心となるためにはその名詞句通常は旧情報であることが必要である。

この事故で3人が死んだ

この事故で3人は死んだ（特定の3人）

後者の文を見たとき通常は、ここには文脈的に特定の3人がいる、とわれわれは解釈する。ハはさておきであると考えることによって、こういった解釈はあたりまえの起こるべくして起こるものであることが明らかになる。すなわち、「X以外はさておき」と宣言するためには、そ

の談話においてXがある程度固定・同定されている、すなわち、話者と聴者の双方がXについてある程度の諒解・了解をもっていなければならない、というのは論理的必然である。なんとなれば、何かよく解からない不定のXをそれ以外のものと区別するなどということは意味がないからである。かくて、（結果的には、多くの場合）ハはすでに談話中で提出・特定化・了解されたもの＝旧情報を要求する。しかし、この文にはもう一つの解釈がある。

この事故で3人は死んだ＝この事故で（少なくとも）3人が死んだ
この場合には未特定の3人である。新情報である。しかし、ここでも、ハが使われているのだ。理由は、ハがさておきの助詞であるからである。先の意とこの意の差はストレスが産み出す。先の意のハは弱ストレスの弱いさておきであり、（ある特定の）3人以外を話題から除外し、この3人を話の中心とするのである。後の意のハは強ストレスで3人未満という“数量”（死んだのは一人、二人）を強く排除し結果的に否定する（ここで、何故四人、五人、すなわちより多い数が問題にならないかの理由はおそらく心理学的な要因である）。

事例数・登場頻度においては、今見た「少なくとも」文は少数派であろう。そこで、ガは新情報に、ハは旧情報に付着するなどという言い方が統計的に蓋然性を得るのでであろう。そして、この言い方は、結果的には概ね正しいが、あくまで、それは結果である。ハとガの区別と情報の新旧には直接的関係は全く無い。

ハに見た事情はガにおいても同じである。上の「3人ガ」文は確かに談話上未特定すなわち新情報を導く（ただし、特定のものにまったく使えないわけではない）。

この事故でその三人が死んだ
という文をあり得るであろう。ソノという語によってこの三人は特定の人物だ）。しかし、例えば、

A：この本を御覧なさい。この本は筒井の最新刊です。

B：へえ、この本がそうですか。

あるいは、

A：太郎は今日は来るのかね

B：はい、来ると思います。あ、ただ今、その太郎が到着したようです。

において、Bのコノ本や太郎は旧情報であるがガによって導かれている。第二の例文においては、ごていねいにもソノという限定までなされて、この上なく特定化、旧情報化したものである。結局のところ、ハ、ガの使い分けと情報の新旧との間には本質的直接的な連関はない、と言わざるを得ないであろう。おおまかな対応関係はあるにしても、それらは結果に過ぎない。すなわち、再言するが、X以外をさておく為には、通常は（あくまで、通常は、である）Xが既に談話の中で確立していなければならない（未だ未定のをそれ以外と区別して何になるか）。結果としてハは旧情報を導くことが多い。しかし、さておく必要が無い、あるいはさておくことが出来ない、ないし、さておくことが論理的に不整合であるような言表においては、従って、旧情報であっても、ガが伴い得る筈なのである。また、さておきの有意味なところでは新情報であっても、ハが伴い得るのである。

ガ、ハの使い分けに新旧情報は本質的連関が無いことは、お馴染みの主節と従節における助詞の交替からも解かることである。

A：君い、太郎は頭のよい奴だねえ

B：太郎が頭がよいことなんて誰でも知っていますよ

Bの太郎は旧情報であり、また、まさしく談話の中心たる主題でもある。が、従属節内ではガで導かれる。文法的に囲い込まれていることによって、従節内の要素は談話のドメイン（集合論用語：思考の対象となり得る全ての元 [ゲン]）に対して直接的には開かれていないため、他をさておく必要がないからである（詳しくは後述）。また、上のB文で、

太郎は頭がよいことは...

の如く、あえて、ハが従節内に登場すれば、それは「強いさておき」であり、山田三兄弟の中で太郎のみが例外的に頭がよいといった類いのことを意味する。この場合は、本来は必要のないさておきが、文の伝えるべき意味内容の一部として積極的に使われているのである（そして、まさにそれゆえに、このような場所では強いさておきしか現れない）。かくて、談話の中で実際に運動しているのは（ハという助詞の本務である）さておきの強度なのであって、情報の新旧とか話の中心（主題）であるとかいった要素に応じた「二種類の助詞ハ」の選択なのではない。